資料-７

森吉山県立自然公園は

国定公園の新規指定を経て森吉山国立公園を目指そう！

私たちは「なぜ 十和田八幡平国立公園編入に反対なのか」

（2025.4.1 更新）

森吉山の価値と未来を考える会

＜目次＞

はじめに・・・

（13）小又川・阿仁川流域・秋田内陸線沿線と里地里山も自然公園に・・・・・・・・・11

① 小又川流域

② スマイルレール秋田内陸線を里地里山の風景に

③ 「奥阿仁マタギの里　にぎわいプロジェクト」の目指す姿について

④ 小又川と阿仁川流域は、許可規制のない普通地域に

（14）森吉山の単独国立公園指定の方向性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

① 阿蘇くじゅう国立公園の阿蘇カルデラの概要

② 阿蘇カルデラ外縁部の国立公園大規模拡張の背景

③ 森吉山カルデラの概要

④ 森吉山国立公園新規指定の課題

⑤ 森吉山国立公園の新規指定は地域の熱意

＜参考資料＞

（１）2022.6.18 御嶽山シンポジウムにおける環境省の提言・・・・・・・・・・・・・14

① 環境省自然環境局国立公園課長　熊倉基之氏のコメント

（２）国立公園の分割事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

① 日光国立公園から尾瀬が独立

② 上信越高原国立公園から妙高戸隠連山が独立

③ 十和田八幡平国立公園は時代が求める発展的な分割を

はじめに

●2021 年 12 月開催の国連生物多様性条約第 15 回締約国会議(COP15)は、各国が 2030 年までに取り組む新たな生態系保全目標を採択した。23 項目の個別目標からなり、世界全体の陸地と海の少なくとも 30%を保護地域又は保護地域以外の生物多様性保全に資するエリア管理(OECM)により保全していくこと(30by30)が柱となっている。

●環境省は目標達成のため、2010 年から実施している国立・国定公園総点検事業のフォローアップを行い、2022 年 6 月に国立・国定公園等の拡張を主眼とする候補地リストを発表。候補地は継続の 8 地域に 6 地域を加え 14 地域(個別には 23 地域)とした。

●環境省の候補地パターンは大きく三つに分かれている。

・タイプ１は、候補地のほとんどが既存の国立・国定公園の拡張(10 候補地)。

・タイプ２は、同じく既存の国定・都道府県立公園の国立・国定公園の新規指定(3 候補地)。

・タイプ３は、「八幡平周辺の大規模拡張地域」に選定された和賀山塊を含む４つの県立自然公園(森吉山、真昼山地、田沢湖抱返り渓谷、太平山)で、十和田八幡平国立公園に編入か又は国定公園の新規指定を選択するタイプである(1 候補地)。

●森吉山はタイプ３の国立編入又は国定公園の新規指定に値する資質が評価され選定された。

●環境省は八幡平地域本体と周辺４つの県立自然公園等を、十和田八幡平国立公園としてどこまで拡張(編入)できるのか、または国定公園の新規指定が望ましいのか、社会環境の観点から検討(地域の意向と熱意・管理体制・全国配置 等)を行っている。

●特に名称変更が伴う公園区分の選択は「地域の意向を尊重して決定したい」との方針を示すと共に、2024 年度中には、その方向性を示したいとしている。

●森吉山の十和田八幡平国立公園編入とは、平成の町村大合併に伴う森吉町の消滅に続き、自然公園の名称からも「森吉の名称」が消え去ることを意味する。

●それは、同時に森吉山本体・奥森吉・奥阿仁に広がる数多の景勝地(花の百名山、日本三大樹氷、四季美湖、太平湖と小又峡、クマゲラの森と桃洞渓谷、天国の散歩道と称される赤水渓谷、マタギの里とその名瀑群)が、総合観光案内板や観光冊子等によって、全て十和田八幡平国立公園の景勝地に置き換わることを意味する。森吉山の公園名称とブランドを守るとすれば、当然「森吉山国定公園の新規指定」を選択する外にない。

●森吉山の国立公園化を目指すのであれば「単独の森吉山国立公園の新規指定である」。その規模は、森吉山全集水域の大又川・小又川を内包し、1000 万年前以降の古いカルデラ外輪山であろう 17 座が囲む約 5 万 ha(500 ㎢)に及ぶ、旧阿仁町と阿仁前田地区全域である。

●環境省は「森吉山は国立公園に拡張するポテンシャルを持っている」「人の営みが自然植生域と風景を作り上げた、自然公園と同等の資質を持つ里地里山も選定の対象とする」とした。2030 年以降の再見直しは、森吉山国立公園の具現化に向けて地域の熱意を示したい。

●私たちは「なぜ　十和田八幡平国立公園に編入ではなく、森吉山国定公園の新規指定を選択するのか」編入条件、地理的課題、公園利用の一体性、国の自然環境整備交付金や誘客促進事業、観光動向の検証から将来の単独国立公園新規指定も視野にその考えを述べたい。

（１）八幡平周辺の大規模拡張地域の基本的なストーリーについて

●環境省は、森吉山の十和田八幡平国立公園編入も国定公園の新規指定も、既にその資質を有していることを前提に、拡張調査等を進めていることはフォローアップの方針に示すとおりである。

●実際の環境調査によっても既にその資質は裏付けされているとし、「考える会」が提案した拡張地域や地種区分の格上調査に加え、国立公園編入又は国定公園新規指定のストーリーを見定めているとのことである。

・第一のストーリーは、十和田八甲田地域を経て八幡平地域から和賀山塊を挟み真昼山地に至る(3 県：12 市・5 町・1 村)奥羽山脈の約 170 kmの脊稜線を、隣接・近接する既存の四つの県立自然公園（森吉山、真木真昼、田沢湖抱返り渓谷、太平山）も含めて、十和田八幡平国立公園の名称で何処まで編入できるかというストーリーである。

・第二のストーリーは、十和田八幡平国立公園に編入という大規模拡張計画に、関係自治体等の合意が得られない周辺の四つの県立自然公園は、個別の拡張地域や地種区分の格上げをもって国定公園新規指定の合意を得るストーリーである。

（２）十和田八幡平国立公園編入に条件はあるのか？

●環境省は「国立公園の再編成であるため、太平山も飛び地で編入するとすれば３県(12 市５町１村)の自治体関係者(観光事業者、山岳関係者、市民団体)全ての合意を得ることが第一条件である」とする。(環境省 2025 年 1 月)

●法的根拠はないが、環境審議会に諮問する前提条件は、国立公園誕生の歴史的経緯や文化・経済圏の長い繋がりなどから地域関係者の合意形成が必要とされている。

●秋田県が議会の要請で行った関係自治体の編入受入れ意向調査によれば、×・△・〇と定まっていないのが現状である。(県自然保護課調査 2022 年)

（３）森吉山他３公園等が十和田八幡平国立公園に編入された場合の名称は？

●森吉山を編入しても「十和田八幡平・森吉山国立公園」となれば、北秋田市にとっては合意できる条件ではあるが、和賀山塊や真昼山地、田沢湖抱返り渓谷、太平山の立地市町村の地域感情から、これは一番難しい問題である。

●環境省は今般のフォローアップで、「八幡平周辺の隣接・近接している和賀山塊や四つの県立自然公園を編入しても、十和田八幡平国立公園という定着したブランド名称を変更する考えはない。また、十和田八甲田地域と八幡平地域を分割する計画もない」と明言している。(環境省 2025 年 1 月)

●青森県は十和田市があり、岩手県は平成の大合併で八幡平市が誕生した。公園名称の自治体が存在する限り、十和田・八幡平という国立公園の名称変更は無理である。

●また、逆に４公園の森吉山、真昼山地、田沢湖抱返り渓谷、太平山が「十和田八幡平国立公園」に埋没することも、十和田や八幡平を公園名称とする限り地理的違和感は拭えない。

●歴史的ストーリーを内包する森吉山、和賀山塊、真昼山地、田沢湖抱返り、特に太平山が十和田八幡平国立公園であるはずもない。地元市町村の合意は元より県民世論の納得は困難であろう。編入に伴う賛否に加え公園名称の合意は最大のテーマである。

●佐竹敬久秋田県知事は「国立・国定の区分もあるが、まずはこの機会を逃さないように県

としても(調査に)協力していく」との考えを示すにとどめている。(2022.12 月 県議会予算特別委員会総括審査)

●津谷永光北秋田市長も山岳団体の要望書提出(2023.2 月)の懇談において、過去には十和田八幡平国立公園分割の話もあったようだが、今回の拡張計画には無いようだ。 大規模拡張と言っても、今のままでの国立公園編入では合意が難しいと思われる。「山岳関係者の皆さんが国立昇格ありきでなければ、北秋田市単独の森吉山は一気に国立編入ではなく、国定公園の階段を踏んでからでもよいのではないか」と述べた。

（４）十和田八幡平国立公園の分割論議

①乳頭温泉郷組合等の十和田八幡平国立公園分割議論

●環境省は「乳頭温泉郷地区に十和田八幡平国立公園分割論があることは聞いているが、今般のフォローアップには分割計画はない。分割協議をテーブルに載せるとすれば、今般のフォローアップ結果を踏まえ、2030 年以降の新たな見直し計画になるであろう」との考えを述べている。(環境省 2025 年 1 月)

●乳頭温泉郷組合の関係者によると、北東北三県にまたがる十和田八幡平国立公園の十和田湖八甲田地域と八幡平地域は、時代が求める利用増進を掲げ共に地域経済の波及効果を求め十和田湖と乳頭温泉郷間の直通バス運行など公益的連携を深めてきた。しかし客層は十和田湖への一方通行になり、早々に相互連携は中止となった経緯もあったという。

●集団施設地区に位置する乳頭温泉郷(乳頭山麓に点在する七つの宿・七つの湯)の関係者は、「一度は行ってみたい日本の温泉郷ベスト 20」にランキングされる乳頭温泉郷のブランド化を更に推進するため、10 年程前から十和田八幡平国立公園の八幡平地域の分割議論を行ってきた。乳頭山や秋田駒ヶ岳をインスタ映えする田沢湖が十和田湖と重なる違和感は理解ができる。八幡平から距離を置く乳頭山・駒ヶ岳を南八幡平と呼ぶ所以でもある。

●今は公園所在地の市町村や観光協会等の反応や温度差を探っている段階であり、いずれはシンポジュウム等を開催し、具体的な分割議論を深めていきたいとのことだ。

②乳頭温泉郷の案内板の変化

●環境省所管の乳頭温泉郷キャンプ場の案内板には「十和田八幡平国立公園　休暇村乳頭温泉郷　乳頭キャンプ場」と表記されている。しかし周辺の道路標識や休暇村等の宿泊施設は、以前の十和田八幡平国立公園の表記は無く「ここは乳頭温泉郷」、「休暇村乳頭温泉郷(National Park Resort)」に張り替えられている。旅行者の視点から見ても別に違和感はない。ここが十和田八幡平国立公園と思っている旅行者は希薄であろう。国立公園ブランドが薄れた感は大きい。

③十和田八幡田国立公園の再編問題は東北３県自治体関係者の同意が先決

●十和田八幡平国立公園は、1936(昭和 11)年に十和田国立公園として指定。その後、1956(昭和 31)年に八幡平地域が追加指定され、現在の公園名に改称された。指定から 89 年を迎え、長らく十和田湖遊覧船観光がステータスであった観光ニーズは、健康志向を求める老若男女が山を闊歩する時代に様変わりした。

●自己主張と個性豊かな森吉山、和賀山塊、田沢湖抱返り渓谷、真昼山地、太平山に連なる一連の再編問題は、環境省の意向に従うのみならず、３県の関係自治体、観光事業者、市

民団体、山岳関係者等を交えて、別ステージで大いなる議論を交わす時代を迎えている。何故なら、これから離婚協議や結婚相談を始めようとする相手を見定めず、愛娘を嫁がせる親はいないからである。

●十和田八幡平国立公園編入は、先ずは４公園の拡張地域と国定公園新規指定を経た上で、十和田八幡平国立公園の「未来を語る熱量」を見定めてからでも決して遅くはない。2030年以降も環境省の国立・国定公園のフォローアップは続くからだ。

（５）地理的一体性の違和感

●環境省の大規模拡張地域ストーリーは、奥羽山脈の南北をつなぐ生態系ネットワーク形成上の重要性を掲げ、青森市の八甲田連峰から八幡平を挟み横手市の真昼山地に至る40㎞を加え奥羽山脈の脊稜線約170㎞(太平山地域除く：3県11市4町)に及ぶ計画である。北海道の日高山脈襟裳十勝国立公園のように、人跡未踏の原生的自然が連なる連峰とは異なり、独自の歴史観を育んだ経済圏や文化圏すべてを十和田八幡平国立公園一色に塗り替えた風景を想像することは困難である。「地域の魅力と特徴を生かした地域経済縮小の克服」という「地方創生」の理念さえ封じる失策になることを私たちは危惧するものである。

●真昼山地(5,903ha)と田沢湖抱返り渓谷(7,477ha)は、単独で国定公園の面積要件(10,000ha以上)に満たないため、または統合して田沢湖和賀真昼国定公園(仮称)の新規指定も可能である。対象地域の真昼山地は県境を跨いで岩手県側に及ぶが、ほぼ国有林であるため早期の環境調査終了が待たれる。但し、太平山(11,897ha)については、地理的一体性から国立公園編入(飛び地編入)は論外であろう。

●森吉山は約1000万年前以降に北海道と東北地方で繰り返された110カ所に及ぶカルデラ噴火の一角を形成していたであろう、東西南北約25㎞のカルデラ中心部の山体に東西約３㎞のカルデラと東にヒバクラ岳～小池ヶ原の馬蹄形火口を重ねて鎮座する複式火山である。

●その森吉山は火山体として他県にまたがらない、秋田県のほぼ中央部に位置する県内唯一の独立峰であるが故に、江戸時代から大正期にかけて活躍した北前船の視標山として秋田山と呼ばれてきた。

●環境省は森吉山の選定理由の一つに、八幡平と同様の火山地形であることを挙げているが、十和田八幡平国立公園の十和田八甲田地域と八幡平地域は、鹿角市を挟んで南北約50㎞に二分され、八甲田連峰から秋田駒ヶ岳や岩手山までのピーク間は80～100㎞に及ぶ。

●森吉山東麓の奥森吉・奥阿仁地区は、火山活動に由来する標高650～800ｍの火砕流大地(溶結凝灰岩)で、赤水峠から柴倉岳まで約４㎞が八幡平地域と隣接はしているが、古いカルデラ外輪山が分水嶺を分けるため、奥羽山脈の脊稜線から外れ連山の形成は成していない。

●したがって、森吉山は十和田八甲田地域や真昼山地との距離感や地理的連続性からして、同様の火山地形を理由に同国立公園の一角に編入される山塊ではない。

●河川と山塊の分水嶺によって生活圏・文化圏・経済圏を異にする日本的風土感からすれば、北秋田市から日々の眺望が叶わない距離感は大きな違和感を覚え、その溝は埋めがたい。

（６）八幡平地域と利用の一体性はあるのか？

●十和田八甲田地域は遠距離のため利用の一体性は皆無である。隣接する八幡平地域の玉川温泉は、戦前までは湯治目的で阿仁部近傍からの往来があった。その「湯治場古道」の証

しとして、奥阿仁と奥森吉から赤水峠を経由し玉川温泉に至るブナの幹には、多くのナタ目が散見され、古いものは大正年代のものが確認できる。

●1994 年に森吉山の公園計画の大幅な見直しが行われた。公園指定当初、奥森吉と玉川地区をつなぐ湯治場古道の公園計画は「車道」であったが、国天然記念物のクマゲラ発見や自然環境の保全優先の観点から「回廊型歩道」に変更した。この公園計画は実施に至らず、国有林野の伐採事業の影響と林道閉鎖のため湯治場古道は消滅状態にある。

●国立公園編入の最大のネックは、関係自治体の編入と受入れ合意に加え、利用の一体性に不可欠な歩道等の導線が無いことである。

（７）森吉山は既存面積で国定公園の新規指定が可能である

●環境省は「環境調査が終わった候補地から随時指定を目指す」としているが、八幡平本体と周辺４公園に和賀山塊や真昼山地を含む全ての環境調査は、青森・秋田・岩手３県の自治体に及ぶため、過去の調査実績(50%)から 2030 年完了は極めて困難と思われる。

●森吉山県立自然公園(15,214ha)は北秋田市一市に存在し、単独で国定公園の面積要件(10,000ha)を満たしている。国定公園指定を早めるには、秋田県が既存の公園面積で環境大臣に所定の「申し出」を行えば５年以内の新規指定は可能である。この考えは 1992 年に秋田県自然保護課が地元自然保護団体と旧森吉町・阿仁町に伝えた提案である。

●例えば、長野県の中央アルプス県立自然公園(35,116ha)は、環境省の国立・国定公園総点検事業に頼らず、長野県が 2015 年に地元自治体等から国定公園化の要望を受けて準備を開始。2016 年に独自の環境調査を実施。2017 年に公園計画と指定書素案を作成。2018 年に地元３自治体で説明会を実施し、2020 年３月に既存面積で国定公園の新規指定を果たした。

●森吉山も既存の面積で新規国定公園化を完了し、環境省の自然環境調査に基づいて拡張区域を加えるという二段階方式で保全地域の拡大を目指すことも一つの手段である。

（８）三位一体の改革に伴う自然公園事業と自然環境整備交付金制度

●国立公園になると、環境省が全て交通インフラや各種環境整備事業を実行しているという思い込みがあるが、国の交付金制度や公園事業の財政措置等は全く期待通りではない。

●特に、三位一体の改革(2005 年)に伴い国立・国定・都道府県立公園に関する地方と国の役割分担が明確化され、これまで主力だった自然公園等整備費補助金が廃止された。

●国立・国定公園の自然公園等環境整備事業は、都道府県が自然環境整備計画を策定し、国の自然環境整備交付金を活用して地方が整備する制度になっている。

① 都道府県立自然公園については

●国立・国定公園以外における奨励的国庫補助事業の廃止により、都道府県立自然公園等の国庫補助整備事業は全て廃止された。

●都道府県立自然公園の環境整備事業は、国の自然環境整備交付金の対象にもならない。
※このことが過去 30 年来の森吉山国定公園化の大きな理由の一つであった。

② 国定公園については

●都道府県に対する国庫補助制度が廃止され、新たに自然環境整備交付金を創設。
地方は自然環境整備等交付金(事業費の 45%が交付金算定)を基に従来の公園事業を行う。

③ 国立公園については

●これまで主力だった都道府県に対する国庫補助事業が廃止された。

●地方は自然環境整備交付金(事業費の 50%が交付金算定)を基に従来の公園事業を行う。

●国は直轄事業の拡充を図るため、特別保護地区や第一種特別地域の歩道整備を含めた。しかし、国の直轄事業であっても特別な保護保全対策を必要とする地区を除く、既存の登山道や施設整備等は地方が継続することになっている。

●中部山岳国立公園(北アルプス)の所在地である長野県では県・松本市・安曇野市が負担金の範囲で補修材料を山小屋組合に提供しているが、資材運搬用のヘリコプター代や労務費は、一般登山者からの協力金と現地山小屋の負担で整備を行っているのが実状である。

●環境省もグリーンワーカー事業の一環で歩道整備に一部負担金を出しているが、むしろ都道府県が直轄する国定公園の歩道整備等の完成度が遥かに高い。環境省は歩道の整備は積極的ではなく(秋田駒ヶ岳一帯の現状を見れば歴然)、集団施設地区の整備が主体である。

④ 自然環境整備交付金のまとめ

●自然環境整備交付金は都道府県が策定する自然環境整備計画に対して交付される。

●計画期間は 3～5 年、総事業費は 2000 万円又は 4000 万円を超えるものが対象となる。

●市町村が事業主体となる場合は、都道府県を経由して交付となる。

●整備事業内容や都道府県と市町村の負担割合は各地域の実情を踏まえ独自に設定が可能。

●秋田県の市町村負担割合は、事業費から交付金額を差引いた額の 20%である。
(例：事業費 1 億円の市町村負担額は、国立 1,000 万円・国定 1,100 万円)

（９）国の誘客関係の推進対策は

●環境省は、国定公園になると国立公園と合わせて国内外にプロモーションを行う。

●国定公園は 56 と多いが、単独の森吉山国定公園として紹介されるメリットは大きい。

●環境省は 2021 年から「国立・国定公園の自然を活用した滞在型コンテンツ創出事業」の募集を開始。自治体や観光協会、ガイド事業者等からなる協議会が実施する「自然体験促進計画(自然公園法に基くソフト事業)」の策定に係る経費の補助(補助率2/3～1/2)を始めた。

（10）北東北の山岳観光の動向

① 山旅観光のマインド

●人気が高まっている山旅観光は、花の名山と日本 100～300 名山の難易度に山小屋のグレードや温泉郷の魅力を加味してフィールドを選択する。その選択肢に公園区分のブランド条件は希薄だ。行ってみたら都道府県立・国定・国立公園であったに過ぎない。

●SNS 全盛時代において、国立ブランドで人は動いていない。いつ・どんなとき・どこへ行けば、どんな遊び・どんな食・どんな出会いが待っているのか。そこに見るべき絶景や異文化に触れる非日常の体験空間があれば、人は地球の極地までも飛ぶ。それが観光である。

② 北東北の十座十湯をめぐる

●日本列島は約 300 万年前から始まった太平洋プレートの東西圧縮に伴う隆起と火山活動によって山国となった。北海道から九州まで南北約 3000 ㎞に及ぶ海洋性気候が育んだ山懐には、箱庭のような渓谷と温泉郷が連なり、約３万本の川と山と海の幸が多彩な食文化を醸成した。奇跡の国「絶景列島 ジオ・ジャパン」と称される所以である。その北東北の山群

に連なる森吉山もまた、宝石箱を散りばめた千変万化の桃源郷を形作っている。

●そうした魅力的な「北東北の十座十湯めぐり」は、次のようなコースが代表的だろう。新幹線を降りたら栗駒山温泉ビューから北上して早池峰山へ。南部富士岩手山はお鉢巡り、裏岩手の 50 kmロングトレイルと八幡平を闊歩し、秋田駒ヶ岳と乳頭温泉郷から神秘の田沢湖へ。花の百名山森吉山では奥森吉・奥阿仁の懐に湖やクマゲラの森を逍遥し、天国の散歩道と称される渓谷やマタギの里の名瀑群を訪ねる。十和田湖から奥入瀬と蔦沼をめぐり、八甲田山の頂を踏んで津軽富士岩木山をゴールとする。さらに白神山地をまたいで、十二湖から男鹿半島へと日本海を南下する。出羽富士鳥海山を辿れば「北東北の十座十湯をめぐる」熟年男女たちの山旅は完歩する。これが「みちのく山旅観光」の姿である。そして、若い世代には北東北の魅力を体感できるロングトレイルのワンダーランドとなろう。

（11）「森吉山」という名称は地域住民のアイデンティティー

●北秋田市は平成の町村合併で、「４町の早期一体感醸成のため」という訳の分からない理由で住所地から大字名(森吉町・合川町・鷹巣町)を捨てた。県北地区の玄関口として北秋田市に開港した空港も「あきた北空港」という愛称名を捨て「大館能代空港」という地理的に合点がいかない曖昧な名称で決着した。「森吉山樹氷空港」は如何であろうか。

●令和の世に入り森吉山に十和田八幡平国立公園へ編入か又は国定公園の新規指定という選択肢が国から示された。環境省サイドは十和田八幡平ブランドで周辺にどんな絵を描くかが課題だと言うが、青森市から横手市まで一色に染まった絵面は想像すらしたくない。

●先の北秋田市主催「2023.6.24 シンポジウム」で基調講演した環境省は、拡張計画や公園区分の考え方の説明も無く、レンジャー(職員)の募集とユニフォームの紹介だけが際立った。極めつけは、コーディネーターが最後のまとめと称し、プロジェクターで自らのミニ講演を始め、参加者の質問に応える機会を拒否した。今般のフォローアップが「陸と海の 30%保全」という目標達成のため、地元の協力を得る手段に位置付けてはならない。自然公園の名称消滅は地域にとって将来的に大きく影響する重大なテーマであるからだ。

●地名・名称・総称・固有名詞は、歴史的・文化的・習俗・民俗学的遺産であるのみならず、山岳信仰が山に神格ならぬ人格を与えたように、公園名称の森吉山は地域住民にとってアイデンティティーそのものである。

（12）独立峰森吉山の旗印は「森吉山国定公園 ジオ・ジャパン Mt 森吉」である

① ぐるっと森吉山をめぐる

●ぐるっと森吉山をめぐる一年を紹介したい。極寒の巨人(樹氷)たちが雪中行軍を終えると山笑うブナ林の眩い春紅葉が峰を走る。新緑のブナ林はエゾハルゼミの蝉時雨。花の百名山は春の妖精たちの乱舞に続き、盛夏はニッコウキスゲなどの猛烈美人たちの舞踏会場に様変わりする。湖・渓流渓谷・瀑布群をめぐるウオータートレックは天国の散歩みちだ。巨木が群立するクマゲラの森を逍遥するトレックは、やがて錦秋の雅からセピアの森へ。四季彩めぐる懐にフォトトレッカーが集う。冬将軍が日本三大樹氷原をつくる頃、山はまた一つ齢を重ねる。この絶景たちが十和田八幡平国立公園であろうはずがない。

② ぐるっと森吉山のブランド化

●森吉山は、どんな季節も・どの瞬間も、妖艶な雰囲気を醸し出し、旅人を呼び込む山容が

特徴である。「ぐるっと森吉山」の、あまたのビューポイントは、十和田八幡平国立公園の価値ではない。森吉山ブランドを磨き上げるフィールドである。

●国立公園指定から 89 年の十和田八甲田地域と 69 年になる八幡平地域。この長い歴史を刻んだゾーンの一角に森吉山が編入されては、森吉山のブランド化を進めることは難しい。温泉資源の知名度と圧倒的な宿泊収容能力で優位に立つ、老舗の国立公園ゾーンに埋没してしまうであろう。

●100 名山に 100 の、200 名山に 200 の競争が生まれるように、利用の増進は一朝一夕に叶うものではない。森吉山オンリーワンの利用増進策を高めるには、秋田空港や他の山岳観光地との結節点になり得る交通インフラの再整備と着地型観光(観光商品や体験プログラムの企画と運営)の拡充に北秋田市の官民がどんな知恵を出し行動するか、その熱量に懸かっている。

●森吉山の名称を捨て、十和田八幡平国立公園の軒下に甘んずる意味とは何か。名を捨て、実を取る意味はあるのか。見返りに得る果実は今のところ見当たらない。

●今般の国立編入・国定公園新規指定の選択は「森吉山の名称を守るのか、自ら消し去るのか」、北秋田市民にとって重大な決断である。「北秋田市民と現職の市長・市議、観光関係者は森吉山の名称を消し去った当事者として、決して歴史に記憶されてはならない」。

●「ぐるっと森吉山」を核に、どんな観光地づくり・どんなマチづくりを目指すのか。十和田八幡平国立公園という老舗の暖簾に頼ることなく、独立峰「森吉山国定公園 ジオ・ジャパン Mt 森吉」の御旗を選択したい。

（13）小又川・阿仁川流域・秋田内陸線沿線と里地里山も自然公園に

① 小又川流域

●小又川は阿仁前田地の阿仁川合流点からから森吉ダムまで約 23 km区間だ。最後の根森田集落の 2 km先に森吉山ダム(四季美湖)が位置する。ロックフィルダムに重なり聳える森吉山が湖面に素描を映す。県道比内森吉線は四季美湖大橋を渡り小又川の山襖と並走する。駐車帯やスナップポイント、湯ノ沢地区の白糸の滝歩道の整備が急務である。

② スマイルレール秋田内陸線を里地里山の風景に

●環境省は拡張対象に「人の営みが自然植生域と風景を作り上げた里地里山の二次的自然環境」を加えた。そこで環境省に再提案した拡張地域が「ぐるっと森吉山」の小又川と阿仁川(大又川)の全集水域と阿仁川と並走する内陸線沿線の里地里山の風土である。

●「ジオ・ジャパン Mt 森吉」をどんなテーマパークに創り上げるのか、そのツールの一つが森吉山の全集水域(小又川・小様川・荒瀬川・打当川・比立内川)を束ねる阿仁川と並走し、連続する 12 カ所の橋梁を走るスマイルレールである。

●奥会津の只見線や南阿蘇鉄道が観光鉄道に特化しているように、秋田内陸線も森吉山周遊観光のアクセスになりうるポテンシャルをすでに発揮している。撮り鉄・乗り鉄たちが闊歩する沿線の里地里山に自然公園の価値を付加したスマイルレールの走りを観てみたい。

③ 「奥阿仁マタギの里　にぎわいプロジェクト」の目指す姿について

●奥阿仁地域(幸屋、比立内、長畑、戸鳥内、中村、打当)は、比立内地区から「打当温泉マタギの湯」に至る約 10 kmの河岸段丘に里地里山が広がる日本の原風景が現存する。特に打

当川は、緑色凝灰岩(グリーンタフ)の河床に森吉山の噴火物が重なる奇岩怪石の渓相が連続し、河岸段丘(25～50m)からは7つの滝が流れ落ちる。並走するスマイル列車が7カ所の橋梁を渡る姿を追い求め、全国の乗り鉄・撮り鉄達が訪れる推奨スポットになっている。

●地域の子供らの川遊び場として慣れ親しんできた里地里山と打当川・比立内川全流域の原風景を国内外のお客様に広く紹介し、壮大な遊び場を造るためには、この10㎞区間を三つの散策歩道(吊り橋、河床・段丘歩道、旧道復活歩道)で繋ぎ、休憩所や売店、展望所や公衆トイレ、多言語標識等を整備しなければなりません。

●「奥阿仁マタギの里　にぎわいプロジェクト」は、仙北市の抱返り渓谷や湯沢市の小安峡にはない、内陸線スマイルレールが里地里山をめぐる渓谷歩道と並走する姿です。

④ 小又川と阿仁川流域は、許可規制のない普通地域に

●環境省は「考える会」が要望している里地里山の拡張地域は、「地種区分が普通地域であれば、奥会津の只見線沿線や阿蘇カルデラ平野部に5万人が暮らす田園都市同様に地権者個々の同意は必要としない」「自治会等への説明会は北秋田市で行ってもらいたい」「北秋田市から要請があれば説明会等に出席し助言も行う」とのことである。

●内陸線沿線、小又川、阿仁川、打当川、比立内川流域の里地里山や河川のビューポイントの展望地、マタギの里探勝路、休憩所、駐車場、游游ガーデンの復活、多言語案内標識等々の整備に自然環境整備交付金を活用するとなれば、当然公園区域に組み入れなければなりません。環境省は「考える会」の提案に対して、「拡張地域の全てを普通地域にすることも選択肢の一つである。九州の阿蘇カルデラのように森吉山本体のバッファーゾーン(緩衝地域)として一体的な景観保全ができ、30by30に貢献できる」としています。

(14) 森吉山の単独国立公園指定の方向性

●森吉山を国立ブランドにするならば、編入ではなく単独の国立公園を目指すべきである。しかし、県立自然公園から国立公園新規指定は普通はない。日高山脈も国定から国立に新規指定したように、森吉山も国定公園の順番を踏まなければならない(環境省国立公園課)。

●そこで、同じ大規模カルデラ噴火の阿蘇カルデラと同様の森吉山大規模カルデラ地形の姿を紹介し、単独の森吉山国立公園新規指定の方向性を探ってみたい。

① 阿蘇くじゅう国立公園の阿蘇カルデラの概要

●阿蘇カルデラは九州のど真中、熊本県・大分県にまたがる阿蘇くじゅう国立公園(指定1934年 S9)、面積72,687ha)に位置する。

●約27万年前に始まり、約9万年前最後のカルデラ噴火による陥没地形である。

●カルデラの規模は南北25㎞、東西18㎞、周囲128㎞、面積380㎢に及ぶ。

●標高 1000m 前後のカルデラ外輪山(高さ約 400m)が阿蘇五岳を囲む日本最大級のカルデラ地形は、ユネスコの世界ジオパークにも登録されている。

●カルデラ内の平野部に5万人余りが暮らす里地里山の風景は「日本の里百選」にも指定。

② 阿蘇カルデラ外縁部の国立公園大規模拡張の背景

●阿蘇の草原(カルデラ外輪山外延部)も含めて、国立公園と同等の資質を有する広大な二次草原が周辺まで一体的に広がっていることが評価され、八幡平周辺同様に大規模拡張地域に選定された。

●近年、阿蘇地域周辺の草地で太陽光発電のメガソーラー開発が相次いでいるとし、九州の経済界、自治体、メディアでつくる「阿蘇世界文化遺産登録推進九州会議」と環境省、熊本県、阿蘇地域の市町村でつくる「阿蘇くじゅう国立公園協議会」は、規制強化の動きを活発化。それに応えた環境省は公園計画の一部を見直し、草原の維持や景観の保全を目的に普通地域から特別地域へ規制強化の方針で、大規模拡張計画を進めている。

③ 森吉山カルデラの概要

●森吉山は、約 1000 万年前以降に北海道西部から奥羽山脈 500 ㎞の脊稜を形成した 110 カ所のカルデラ噴火の一角を形成している。その規模はおよそ東西南北約 25 ㎞、周囲 130 ㎞超、面積約 50,000ha(500 ㎢)のカルデラに標高 300～1000ｍの外輪山 17 座(注 1)を連ねる姿が想像できる。(NHK/BS 絶景列島 ジオ・ジャパン参考)

●森吉山本体はカルデラ中心部を埋めるように、十二単衣を纏った主峰向岳(1454ｍ)が山頂部に東西約３㎞のカルデラ(注 2)を重ねて鎮座する。

●そのカルデラ東部の奥森吉～奥阿仁地域は、約 200 万年前と 100 万年前に噴出した火砕流が溶結凝灰岩となり平坦な火砕流大地を形成した。その範囲は森吉山県立自然公園(15,214ha)の半分余りを占めていると思われる。

●火砕流大地は長年の浸食により、奥森吉は太平湖や小又峡・桃洞渓谷・赤水渓谷・粒様渓谷・様ノ沢渓谷が、奥阿仁は中ノ又渓谷・立又渓谷などが一枚岩盤のＵ字渓谷を形成し数多の甌穴群や名瀑群が誕生した。この地形も「世界ジオパーク」の登録に値するであろう。

●森吉山の全集水域である奥森吉の小又川と奥阿仁の大又川は阿仁前田で合流し、かつては大きな湖の時代もあったであろうカルデラの一角を押し流し阿仁川になったと想像する。

●カルデラ平野部の人口は阿仁地区 2,185 人・阿仁前田地区 1,419 人が暮らす。小又川と大又川の流れが平野部に造り上げた里地里山は、何処を切り取っても日本の原風景である。

●天然温泉資源に大きな差はあるが、森吉山とその全集水域は、阿蘇カルデラ 38,000ha、八幡平地域公園面積 40,491ha を超え 50,000ha に及ぶであろう。

④ 森吉山国立公園新規指定の課題

●十和田八幡平国立公園に一旦編入されると、関係自治体の分割論議に巻き込まれ、森吉山国立公園に分割する可能性は極めて難しくなる。先ずは今般の見直しで国定公園に新規指定を果たす。そして 2030 年以降も継続するであろう国立・国定公園の見直しにおいて、国立公園の新規指定を目指すことである。

●国立公園の面積要件は現在の２倍の３万 ha 以上である。その拡張地域と手法を以下に示す。

・**第１は**、戦後復興から高度成長期に隆盛を誇った天然秋田スギの伐採跡地で、自然再生を遂げている太平湖の全集水域(自然空間利用林)。森林管理署が成長率 50%以下のスギ植林地を伐採対象地から除外し、針葉樹・広葉樹の「混交林の森」として施業管理(木材生産林)を実施している、２つのタイプの国有林である。

・**第２は**、森吉山西麓に広がるレクリエーションの森(国有林)である森吉山スキー場全エリアと、約 1,000ha を上回るであろうブナ林(社有林)である。

・**第３は**、小又川の里地里山から続く森吉山ダム四季美湖と、その上流域を親水ゾーンとして普通地域として拡張する国有地、県有地、私有地である。

・**第４は**、マタギの里～阿仁前田に至る約 30 ㎞の大又川流域と、その里地里山と並走する内陸線スマイルレール沿線の拡張。特に比立内地区から遊遊ガーデンに至る段丘河川は、小安峡や抱返り渓谷を凌駕する渓谷美を誇る(一級河川、国有地、私有地、入会地等)。

・**第５の課題**は、第１～４の課題すべての拡張地域を内包するのが、森吉山全集水域の大又川・小又川、阿仁川、打当川、比立内川を東西南北約 25 ㎞の山群 17 座が囲む森吉山カルデラである。約５万 ha(500 ㎢)に及ぶであろう旧阿仁町と旧森吉町阿仁前田地区全域を森吉山の特別地域と同化させるバッファーゾーン(緩衝地域)として許可規制(届け出のみ)がない普通地域(一般的な届け出は確認申請で済む)にすることである。

そのモデルは、カルデラ平野部に５万人余りが暮らす田園都市の里地里山全域が国立公園(普通地域)である阿蘇カルデラである。だとすれば、森吉山麓は何処を切り取っても国立公園の景観要件に叶う資質を持っていると言えよう。

●**その最大の課題**は、学術的知見をバックボーンに、景観要件(偉大さ・雄大さ・原生性・希少性・特殊性・固有性及び地学的現象の劇的性のいずれか又は複数の観点から、同一の風景式形中、我が国の風景を代表するとともに、傑出した自然の風景を有する地域)を満たす、説得性ある資質条件とストーリーを如何に作り上げるかに掛かっている。

⑤森吉山国立公園の新規指定は地域の熱意

●環境省はすでに「森吉山は国立公園の拡張又は国定公園の新規指定に値する価値を持っている」、「自然公園と同等の資質を持つ里地里山を拡張地域に選定していく」としている。

●十和田八幡平国立公園の一角に甘んずることなく、ぐるっと森吉山の山塊を囲む全集水域の国立公園化に向けて、地域の熱意を示す官民挙げての行動を求めたい。

＜参考資料＞

（１）2022.6.18 御嶽山シンポジウムにおける環境省の提言

・環境省は木曽山脈の御岳県立自然公園(長野県)・御嶽山県立自然公園(岐阜県)を、国定公園の新規指定候補地とした

・御嶽山シンポジウムは、環境省のフォローアップ結果発表の 4 日後に異例の速さで開催。

・長野県と岐阜県に跨る御嶽山(3,067m)は 23,322ha で、国立公園の面積要件(30,000ha)に満たないが、地元では以前から「3,000m を超える独立峰で国立公園に指定されていない山は御嶽山だけである」という国立公園昇格論が持ち上がっていた。

・また。2014 年に起きた御嶽山の水蒸気爆発による死者・行方不明者は 63 人に上り、「戦後最悪の火山災害」となった。御嶽山では山麓の復旧整備やシェルターなどの安全対策に迫られ、自治体関係者は県立公園から国定公園の新規指定をその好機と捉えていた。

◎主　　催：木曽町、玉滝村、公益財団法人日本自然協会
◎後　　援：長野県、岐阜県、高山市、下呂市
◎テ ー マ：御岳山の価値と未来（国立・国定公園に向けて）
◎基調講演：「日本の山岳信仰と御岳の宗教文化」皇學館大學教授：中山 郁
◎話題提供：「国立・国定公園の今後の役割と発展」環境省国立公園課長：熊倉基之
「木曽町開田高原における保全活動の取組」木曽町環境協議会長：稲垣　康
「御岳山の価値と自然保護の課題」飛騨高山歩こう会会長：小野木三郎

① 環境省自然環境局国立公園課長　熊倉基之氏のコメント

・パネルデスカッションで環境省自然環境局国立公園課長の熊谷基之氏は、地元の国立公園昇格論(単独又は中部山岳国立公園に編入)について答えた。

・今回のフォローアップで国立公園に新規指定(昇格)は日高山脈だけである。日高山脈が国立公園とした理由は既に国定であり、今回は一段引き上げる形で国立とした。

・奄美大島国立公園も国定から５年後の 2017 年に国立に指定した。

・都道府県立公園から一気に国立公園になることは、普通はない。

・御岳山を中部山岳国立公園(北アルプス)に編入したいという考えのようだが、今回は御嶽山の特質(3,000m 級の独立峰、山岳信仰の歴史的優勢)にスポットを当てたものである。

・欧米の観光客は「スピリチュアルツーリズム」に感心がある。「御岳山も世界文化遺産の熊野古道のような特色を生かした山岳観光を目指してはどうか」と結んだ。

（２）国立公園の分割事例

●景観の保護と利用増進を目的にしてきた国立公園には、日光と尾瀬のように違うタイプが一緒だったり、東西に分離している上信越高原だったり、富士箱根伊豆のように場所が分かりにくい所が多い。環境省は 2000 年代に入り国立・国定公園の見直しを進めてきた。

①日光国立公園から尾瀬が独立

●尾瀬が日光国立公園内にあることを知らない人は多い。1997 年頃から入山者が 60 万人から半減した地元は「日光・尾瀬国立公園」にしてほしいと要望していた。

●尾瀬地域は、日本を代表する山地湿原やそれを取り囲む、燧ケ岳や至仏山などの 2000m級の山並みがあり、優れた景観と自然性に恵まれている。一方の日光地区は東照宮などの文化財目当ての観光客が多く観光色が強い。隣接はしているが植生や地形が別物である。

●環境省は 1997 年に「名前だけではなく独立を考えたらどうか」と地元に持ち掛けた。一般観光よりも自然志向のニーズを背景に、国立・国定公園の見直しを進めている環境省は、尾瀬を国立公園再編のシンボルにしたいという待望論があった。独立を巡っては、群馬、福島、新潟の地元３知事が 2006 年に単独化を求める要望書を環境省に提出した。2007 年に尾瀬は独立し尾瀬国立公園(37,200ha)が誕生した(毎日フォーラム、NACS-J 抜粋)

②上信越高原国立公園から妙高戸隠連山が独立

●上信越高原国立公園は、1949 年に志賀高原・谷川・苗場・草津・万座・浅間地域(東部地域)が指定され、その後、1956 年に妙高・戸隠地域(西部地域)が編入された。

●2010 年の総点検の結果、西部地域は東部地域とは異なる風景形式を有していることが明らかになった。また、利用面においてもそれぞれの地域が独立性・独自性を有している。

●以上により、火山・非火山の多様な山岳が密集し点在する高原、湖沼がこれと相まって一体的な自然景観を作り出し、自然景観及び利用状況の面で特質が異なる西部地域を分離し、2015 年に妙高戸隠連山国立公園(39,772ha)が誕生(最初の２つに戻った)した。

③十和田八幡平国立公園は時代が求める発展的な分割を

●上信越高原の西部地域と東部地域間は約 25 km に対して、十和田八甲田地域と八幡平地域は鹿角地区を挟んで約 50 km離れている。同じく利用面において両地域が独立性・独自性を有していることに鑑みれば、十和田八幡平国立公園の方が分割要件を優に満たしていると言

えるであろう。単独の十和田八甲田国立公園誕生は、３県にとって納得できる分割であるし、八幡平田沢真昼国立公園は新たな時代の使命を付加した国立公園となるであろう。

（注１）森吉山カルデラの外輪山

国見峠(320m)～姫ケ岳(651m)～根烈岳(835m)～八羽岳(896m)～
三枚平山(931m)～白子森(1179m)～大仏岳(1167m)～大覚野峠(583m)～
高崎森(933m)～ブナ森(1016m)～赤水峠(960m)～柴倉岳(1202m)～
砂子沢峠(594m)～小繋森(1016m)～源五郎岳(559m)～
昼様山(323m)～七角山(313m)に戻る 17 座。

（注２）森吉山頂部カルデラの外輪山

一ノ腰(1265m)～前嶽(1280m)～石森(1308m)～向岳(1454m)～
ヒバクラ岳(1326m)～カンバ森(1188m)